



(枕崎市)

かごしま黒豚ぶたの父

園田兵助ひょうすけ

みなさんは、鹿児島の特産である黒豚を知っていますか。「ほどよい弾力だんりょくがあつて歯切れがよい」、「ほのかに甘い脂あぶらにうまさがある」といった特徴とくちょうがあり、豚肉の中でも特に高級品として全国に知られています。この現在の「かごしま黒豚」の生産の土台をつくった人物が、園田兵助です。

園田兵助は、一八六四年（元治元年げんじ）四月一日、川辺郡ひがしみなみかたむら東南方村枕崎（現在の枕崎市）に、藩馬役はんばやくの園田仲兵衛ちゅうへいの長男として生まれました。十七歳の頃には、父の見習いをしながら、伯楽はくらくの修行を重ねていたと言います。

【藩馬役】

薩摩藩の兵馬の役にたてるためなどに、馬を管理、調教する仕事。

【伯楽】

馬のよしあしを見分け育てる人。

【関連年表】

一八六四年 誕生

一八八五年

獣医を開業する。

一九〇二年

我が国で初の養豚組合として、有限責任・東南方村養豚購買組合が発足。

一九〇七年

兵助が中心となって、無限責任・東南方村養豚信用購買販売利用組合を設立。

全国に先駆けて種豚登録制度を確立。

一九三五年 死去

一九五七年

「兵助杯」が創設される。

一八八五年（明治十八年）、兵助は獣医師の免許を受

け、広大な敷地を持つ生家の一角で獣医を開業しました。

兵助の技術は高く、馬や動物にやさしい「馬医ドン」と呼ばれ、細かなところまで行き届く丁寧な治療で、農民からは非常に頼りにされました。

その一方で、不注意で怪我をさせた馬の治療に来たような飼い主には、大変厳しく、「お前たちが大事に飼わないから、こんなことになるんだ。」と怒鳴りつけることもしばしばでした。

また、古い慣習にとらわれず、新しいことに意欲的だった兵助は、獣医のかたわら、十数頭のホルスタイン種の乳牛を買い入れて、チチ屋（牛乳屋）を始めました。

当時、白黒まだら模様の牛は大変珍しく、兵助は、手しぼりの乳を桶に入れ、配達先の各家で鍋に移して回りま



【ホルスタイン種】
代表的な家畜牛の一種で、オランダ及びドイツ北部原産の黒白斑の乳牛。

した。この頃の牛乳は、病人や母乳不足の赤ん坊だけが飲むことができる、薬と同じような貴重品でした。牛乳の栄養バランスの良さを知っていた兵助は、できるだけ多くの人が牛乳を飲めるようにしたいと考えたのではないでしようか。

また、兵助は、この頃たびたび発生したコレラやチフスなどの感染症予防にも全力を注ぎました。牛舎の衛生管理には非常に厳しく、牛と牛舎は朝晩水洗いし、板張りの床に牛糞ぎゅうふんが少しでもあるのを見逃しませんでした。兵助の甥おいで、獣医の園田春芳はるよしさんは、「子どもの頃、おじの清潔な牛小屋を見て育ったせいかな、掃除の行き届いていない牛舎で飼われている牛のチチは飲む気がしない。」と話しています。

明治中期の頃の枕崎市は、耕地が狭せまいうえ、毎年台風

【コレラ】

細菌感染症の一種。激しい下痢げりや嘔吐おうとを伴う。

【チフス】

細菌感染症の一種。高熱や発疹ほっしんを伴う。

【考えてみよう】

兵助は、動物や人間に対して、どのような思いで向き合っていたのだろう。

に襲われる、自然環境の厳しい地域でした。台風のため
に大きな被害ひがいを受けるので、農家の経済状態は極めて悪
く、沿岸漁業を主とする漁民の生活もまた、とても苦し
いものでした。農業でも漁業でも厳しい生活を強しいられ
ている枕崎の人々の生活を、何とか向上させたいと考え
ていた兵助は、「枕崎に適した良い産業はないものか。」
と、いつも頭を悩ませていました。

やがて兵助は、養豚で人々の生活を安定させられない
かと思案するようになりました。台風の被害を受けにく
いサツマイモと、枕崎では手軽に手に入る魚類が、豚の
飼料として活用できると考えたのです。同じように養豚
の可能性に着目していた当時の鹿児島県からの後押しも
受け、兵助は、まず農家を一軒一軒訪問し、豚を飼うこ
とを勧めて回りました。

もともと口数の少ない彼は、世間話の合間にぽつりぽ

つりと養豚の有利さを語り、最後に「お前も豚を飼え。」
と一言置いて帰るのです。そんな風に兵助は、報酬ほうしゅうもな
いのに、日々養豚の有利性を説き勧めすすめ、やがて明治四十
年代には、枕崎全体で飼育されている豚の頭数は数百頭
に達していました。

兵助らが飼育を勧めたのは、枕崎の土地に住みついて
いた豚ではなく、イギリスから輸入した黒豚（バークシ
ャー種）でした。この黒豚の肉質は、それまでの豚と違
い最上と言われていましたが、兵助は、これをさらに優
れた肉質にするため、鹿児島県が取り組んだ品種改良に
も積極的に協力しました。養豚をするならば、最高の豚
を飼育しなければ、新しい産業としての価値がないと考
えたのです。これが後に鹿児島県全体に広がり、黒豚は
全国に誇る鹿児島の特産品となっていきました。

【鹿児島県の豚飼育頭数】

平成二十年現在、約百三十万頭
が飼育されており、全国一位であ
る。

【バークシャー種】

イギリス原産の黒豚。肉質、肉
色とも良く、精肉に適している。



【無限責任・東南方村養豚信用購買販売利用組合】

定期せり市による共同販売と、種豚登録制度による豚の改良、増殖を目的に設立された。

種豚改良のための登録制度は、全国に先駆けて開発されたものであり、また、豚の品評会や講話会による技術指導などを行い、事業の発展を促進した。

これらの取組により、枕崎の豚の改良は着実に進み、大正の初期には、既に全国にその名を知られるようになった。

この組合は、一九五〇年（昭和二十五年）に枕崎養豚農業協同組合となったが、現在は鹿児島県経済協同組合連合会に統合されている。

（「鹿児島県養豚史」から）

また、どんなに上質の豚を育てても、販売経路が広がらなければ需要は増えないとも考えた兵助は、養豚組合の設立にも尽力しました。このときも兵助は、「皆のため、枕崎のために。」という思いから、日夜各家を回って組合の必要性を説明しています。「組合をつくって、お前もかたれ。」と、例の調子で勧めて歩く兵助の人徳と努力なくしては、全国に先駆けてこの枕崎養豚組合が、誕生することはなかったでしょう。当初、地元の人からは「ブタ会社」と呼ばれていましたが、この組合の設立によって、養豚業を営む家庭の生活も少しずつ安定してきました。

自分の利益を捨てて人々のために努力する兵助は、皆に支持されて初代組合長となりました。商人たちからも尊敬を集め、一九三五年（昭和十年）に七十二歳で死去するまでの十五年間、兵助は組合長として、枕崎養豚の

「加入しなさい」の意。

【考えてみよう】

兵助は、どのような気持ちで、組合長を引き受けたのだろうか。



〔鹿兒島県養豚史〕から

【兵助杯受賞の様子】

発展に数々の業績を残しています。

後年の兵助は、枕崎養豚組合長の他にも、村会議長や川辺郡会議員、枕崎衛生組合長などの公職と社会奉仕に一身を捧げました。

また一方、兵助は家庭も大切にし、息子の実治さんの妻である篤美さんは、嫁として十年以上兵助と一緒に暮らしましたが、「一口も苦情を言われたことがなかった。」と、兵助の人柄を懐かしんでいます。

彼の業績を讃えるため、一九五七年（昭和三十二年）、養豚家など四千人からの寄付金で、彼の生家に銅像が建立されました。また同年には、枕崎市の高等登録豚が百頭を突破したことを記念して、実治さんからの寄付金を基に、枕崎市の共進会における最優秀者に授与される「兵助杯」が設立されました。

【高等登録豚】

体型や生産能力が特に優れた豚や、よい子豚を産んだことが証明された豚を、高等登録豚として登録する。

【共進会】

優秀農産物等を一般からの出品により展示し、生産技術の交流や向上を図る会。

枕崎の養豚が鹿児島県の養豚発展に果たした役割は大きく、「兵助杯」は、養豚家の人々から、大変な名誉として、今も大切にされています。
